「東京オリンピック 2020」が終わって

21.08.20　守山裕次郎

「東京オリンピック 2020」が終わり、10 日余りが経った。新型コロナパンデミックの影響で大会は昨年から 1 年間延期された。感染力の強い変異株の発生もあり、延期されていた大会開催の有無につき、直前まで大きな議論がなされたのは周知の通りである。

結果的に一部を除き無観客での開催が決まり、200 を超える多くの国々から選手が集い、日々熱戦に次ぐ熱戦が繰り広げられた。テレビの前で手に汗握り一喜一憂、日本人選手の予想以上の活躍もあり、多くの感動と元気、勇気をもらうことができた 2 週間だった。

この 1 年半余り、緊急事態宣言の繰り返しで「巣ごもり生活」を余儀なくされ、多くの人がストレスを抱える中で、老若男女を問わず連日の感動が得られたと思う。単に金銭的経済効果だけでは計れない、極めて大きなエネルギーを我々に与えてくれた。

今回オリンピックの様々な競技のうち、個人的に印象に残った順に以下振り返ってみた。

１．卓球

・混合ダブルス（水谷、伊藤）：金　　・女子団体（石川、伊藤、平野）：銀

・男子団体（水谷、丹羽、張本）：銅　・女子シングルス（伊藤）：銅

〇<u>混合ダブルス（水谷、伊藤）：金</u>

準々決勝で対戦したドイツペアに、一時 90%以上の確率で敗戦を覚悟した場面があった。だがここで諦めず、粘りに粘って凌ぎきり、奇跡的に勝利したこの試合がすべてだった。

・対ドイツ戦（準々決勝）：

ゲームカウント 3-3 での最終ゲーム、水谷・伊藤ペアは 2-9（11 点ゲーム）、あと 2 点で敗戦の「絶体絶命の危機」だった。（ここからの挽回はほぼあり得ない：水谷選手後日談）

ここで粘って 6-10 まで挽回したが、あと 1 点取られての「ほぼ敗戦」を覚悟した。

ところがここで相手ペアにプレッシャーがかかり、10-10 のデュースに縺れ込み、その後シーソーゲームとなって、最後は 16-14 での「奇跡の逆転劇」で勝利した。

・対中国戦（決勝）

準決勝で香港ペアに勝ち、決勝は王者中国との対戦だった。ゲームカウント 3-3 となり、最終ゲーム 8-0 と圧倒、優勝目前となった。その後 9-5 まで追い上げられ、一瞬ドイツ戦の逆バージョンかと心配されたが、結果 11-6 で「日本卓球界初の金メダル」を獲得した。

なお今大会、日本が獲得した 27 個の金メダルはどれもが最高だが、相対的に評価して、この卓球混合ダブルス「水谷、伊藤ペア金メダル」が MVP だと個人的には考える。

２．ソフトボールと野球

１）ソフトボール

大会期間中に 39 歳となった上野投手を中心に、チーム一丸となっての戦いだった。

変則的な勝ち上がりルールで、準決勝で負けた米国だったが、決勝で再び対戦した。

決勝の先発は上野投手、6 回先頭打者にヒットを打たれるまで好投し、ここで次世代の

若きエース後藤投手（20歳）に交代、0で抑えた。最終7回に再び上野が登板（ソフトボール特有のルールで）この回を見事に抑え、結果2-0の完封で念願の優勝を遂げた。

２）野球

「侍ジャパン」は過去のオリンピック、WBC等で十分期待に応えるだけの成績を残せていなかった。初の金メダル獲得を目指した「稲葉ジャパン」の活躍に大いに期待した。

※ソフトボール選手交代の特殊ルールと同様、チームの勝ち上がり方は変則的なルールで、5連勝すれば文句なしの完全優勝だが、途中負けても優勝の可能性が残るものだった。

・対ドミニカ（初戦）：

９回表まで1-3でリードされていた。敗戦濃厚のその裏、3点取っての逆転サヨナラ勝ち。一挙にその後の流れを変える試合だった。（卓球混合ダブルス準決勝の逆転勝ちと同様）

・対メキシコ（2戦目）：

初戦対ドミニカ戦の逆転サヨナラ勝ちの勢いのまま、7-4で勝利した。

・対アメリカ（3戦目）：

エース田中が先発したが、彼本来の投球内容とは違って4回までに2点を先行された。その後点を取り合い9回表で5-6とリードされた。その裏しぶとく1点取って6-6の同点にし、タイブレークでの延長戦になった。（延長のタイブレークは特殊なルール）10回表アメリカの攻撃を0点に抑え、その裏1点取って見事サヨナラ勝ちした。

・対韓国（4戦目）：

アメリカに9回裏同点、延長サヨナラ勝ちした勢いで、宿敵韓国に5-2で勝利した。

〇対アメリカ（決勝戦）：

準決勝で勝った相手だったが米国が敗者復活戦で韓国に勝利し、再び決勝で日本と対戦することになった。（マナーの悪い韓国が、決勝の相手でなくて本当に良かった！）

日本は森下が先発、3回裏に8番村上のソロホームランで1点先取した。その後投手陣は千賀、伊藤、岩崎の継投で米国打線を0に抑えての僅差の戦いになった。8回裏、貴重な1点を追加、9回表を栗林が抑え5連勝での完全優勝、念願の金メダルが獲得できた。

３．柔道、レスリング

１）柔道

・男子個人戦：金5　　・女子個人戦：金4、銀1、銅1　　・混合団体戦：銀

連日の金メダルラッシュで、「日本柔道の復活」を確信した大会だった。

阿部兄妹（一二三、詩）揃っての金メダルも素晴らしいが、男子73キロ級優勝の大野選手のまるで「古武士を思わせる」立ち居振る舞いに「日本柔道の神髄」を垣間見た。

２）レスリング

・男子：金1、銀1、銅1　　・女子：金4

男女合計で金メダル5個、銀メダル1個、銅メダル1個の立派な成績だった。

特に、川井姉妹（梨紗子、友香子）揃っての金メダルは素晴らしい！柔道の阿部兄妹も同様で、子供の頃からの家庭環境（含、厳しい躾け）並びに周囲の人の支えがあっての

結果だそうで、多くの人たちとの絆が阿部兄妹、川井姉妹を育てたのは間違いない。

４．体操

・男子総合（橋本）：金　・男子鉄棒（橋本）：金　・男子団体：銀

・男子あん馬（萱）：銅　・女子ゆか（村上）：銅

日本のエース 32 歳の内村航平が鉄棒で落下、予選落ちした時は「お先真っ暗」だった。しかしながら 19 歳の若きホープ橋本が代わって優勝、個人総合も見事金メダルを獲得、日本のお家芸種目の体操の将来に、再び大きな希望が持てる結果となった。

５．競泳

・女子 400m個人メドレー、200m個人メドレー（大橋）：金 2

・男子 200mバタフライ（本多）：銀

競泳全体の成績は必ずしも期待通りでなかったが、女子個人メドレー大橋選手の 2 個の金メダルは実に立派だった。（かつて極度の貧血で、40 人中最下位になった経験あり）更に特筆すべきは、白血病から見事に復帰した池江選手である。結果は残せなかったが、難病と闘う人たちに大きな希望を与えたその頑張りに「特別敢闘賞」を差し上げたい。

６．バドミントン

・混合ダブルス（渡辺、東野）：銅

期待した男子シングルス桃田、女子シングルス奥原、山口が残念な結果に終わった中で、混合ダブルス渡辺、東野ペアが接戦に勝って銅メダル獲得の瞬間、大いに感動した。

７．テニス

王者ジョコビッチその他強豪が出場の男子シングルスは、錦織にとって厳しかった。女子は最終聖火ランナーを務めた大坂に期待したが、3 回戦敗退は予想外だった。

８．ゴルフ

男子の松山は最終日まで優勝争いに絡んだが、ぎりぎりでカップに嫌われたホールが最終日 5~6 箇所あった。最後は銅メダルを 7 人で争ったが、運がなく残念だった。一方、女子は稲見が最終日に追い上げて 2 位争いに勝利、見事銀メダルを獲得した。

９．スケートボード

・男子ストリート（堀米）：金　・女子パーク（四十住）：金　・女子パーク（開）：銀

・女子ストリート（西矢）：金　・女子ストリート（中山）：銅

今回オリンピックで初めて知った競技だったが、若い（幼い）日本人選手の大活躍に大変驚いた。（西矢：13 歳、開：12 歳 11 ヶ月で、メダル獲得の最年少記録を更新）

10．その他

・空手（金、銀、銅：各 1）　・ボクシング（金 1、銅 2）　・フェンシング（金 1）

・サーフィン（銀、銅：各 1）　・スポーツクライミング（銀、銅：各 1）

・自転車（銀 1）　・陸上（銀、銅：各 1）　・アーチェリー（銅２）　・重量挙げ（銅 1）

※　女子バスケットボール銀メダルは、想定外の画期的成績と言える。（アッパレ！）

※　サッカー男子は過去に比べ大きく進歩したが、メダル獲得には更なる進化が必要！

「東京オリンピック 2020」開催で思ったこと、感じたこと

１．開催中止を強く主張した野党及びメディアへの疑問

コロナ感染拡大を理由に、共産党、立憲民主党等、野党や多くのマスメディアは開催の中止を強く主張した。特に朝日新聞は五輪スポンサーにもかかわらず、5 月 26 日付社説でこれを主張した。（欧米に比べ我が国感染者、死亡者数は圧倒的に少ないにもかかわらず）

日本は東京オリンピックを自ら招致したことを忘れてはならない。日本がコロナ汚染国と認定され、諸外国からの参加キャンセルが続出したならば、中止の判断もあっただろう。だが中止すれば、日本を含め 200 カ国以上の国の若者が参加する機会を失い、各国選手の活躍に期待し、世界の数億人がテレビ観戦する機会を失うことを想像したのだろうか？

これが国民体育大会なら中止して何ら問題はない。だがオリンピックは自らが招致した国際公約である。そのことをすっかり忘れた自己中心的主張は、日本人として恥ずかしい。

一方で、朝日新聞は当社主催の高校野球中止は主張しない。海外からの選手、関係者がコロナ対策に万全を期しても、オリンピック開催には強く反対し、全国からの選手が参加する甲子園での高校野球は OK との主張は全く理解できない。自社の利益のみを追求し、国民や世界の人たちへの責務を考えない、極めて無責任な体質が今回もまた露呈した。

２．海外選手、関係者からの日本人への感謝

コロナ対策で、海外選手や関係者の行動は宿泊施設と競技会場の往復に限られていたが、様々な場面での多くのボランティアの気配りが、大きく評価されたそうである。

最近はツイッター等により様々な出来事の発信が可能で、それらを見ると彼らは一様に日本人ボランティアのホスピタリティに感動した様子がうかがえる。中でも同じ日本人として、大いに誇りに感じた下記の事例を是非紹介したい。

陸上男子 110m 障害準決勝出場のハンスル・パーチメント選手（ジャマイカ）はバスを間違えて別の会場に着いてしまった。バスで選手村に戻って再び別のバスで国立競技場に行く時間はなかった。そこで彼は、女性のボランティアに話をして助力を求めたところ、タクシー代を渡してくれたという。おかげで準決勝に間に合い、決勝は１位で金メダルを獲得できたそうである。感謝を伝えるため、彼はそのボランティアを見つけだして再会、その様子がインスタグラムに投稿されており、実物の金メダルを見せると、ボランティアの女性は大変驚いていたとのことである。（ジャマイカの観光大臣は感謝の気持ちとして、彼女をジャマイカに招待したとの後日談あり）

３．「東京オリンピック 2020」を総括して

大会前は実施すべきか否かで、国論を二分する侃々諤々の議論があったが、結果として実施して本当に良かった。この日のため、努力に努力を重ねた世界中の選手たちに晴れの舞台が提供でき、それに対する感謝の気持ちが、戦い終えた選手談話でも語られていた。

変異株によるコロナとの戦いはまだ続きそうだが、１年半余りの「巣ごもり生活」でのストレスもオリンピック観戦で少しは発散できた。やはりスポーツは素晴らしい！！

以上